

# 投資とビッグデータ

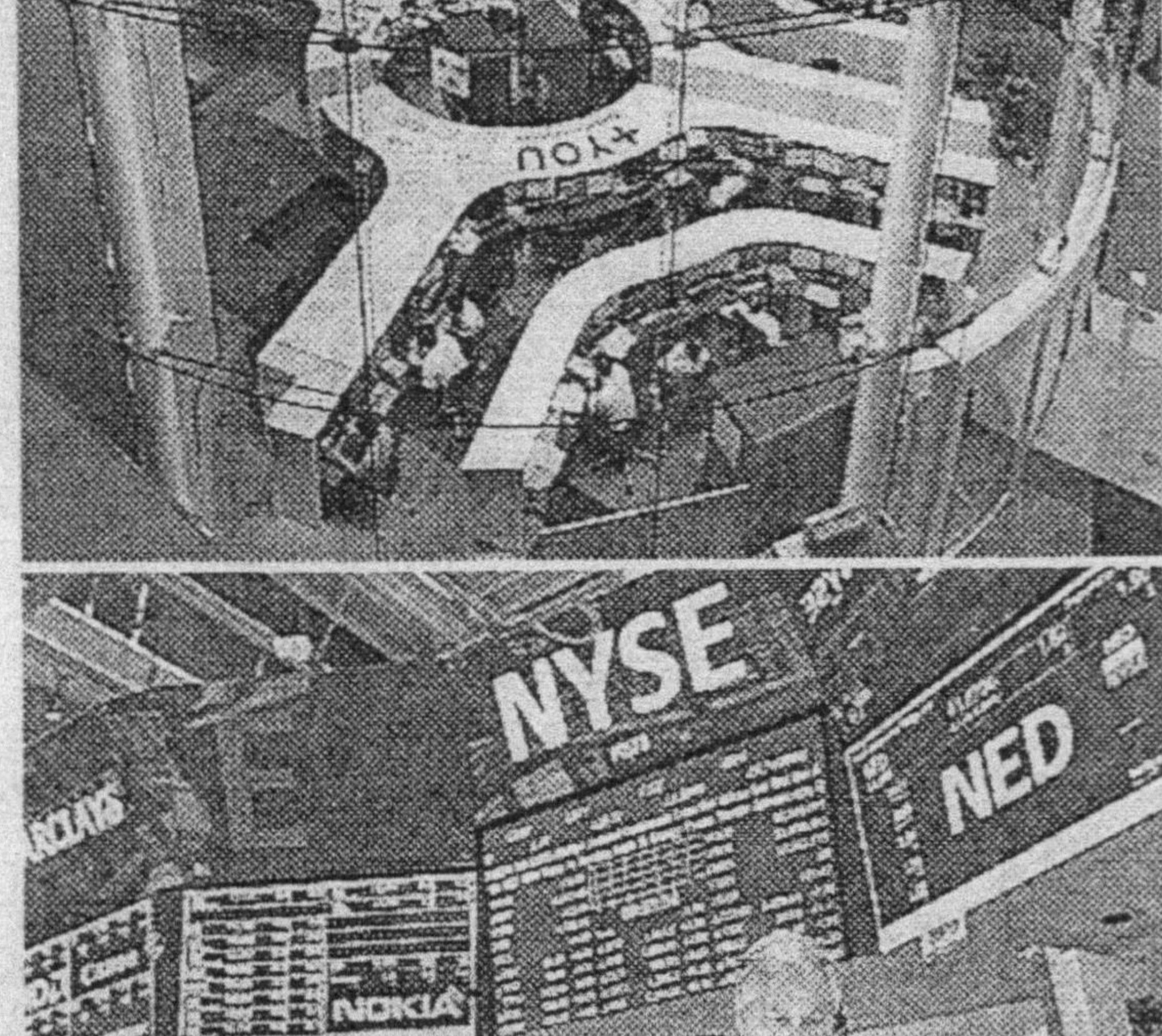
□ 上

これまでの投資の常識を塗り替える可能性も

(東証アローズII写真上)とNY証取II(同下はロイター)

金融工学とIT(情報技術)の進歩により、投資に新しい潮流が生まれつつある。桁外れのデータを蓄積し瞬時に処理するビッグデータ分析だ。投資のこれまでの常識を塗り替える可能性を秘める。

「上がるから買う、買う



## 市場心理もすぐ分析

東京工業大学の高安美佐子准教授は横浜市にある研究室で、パソコンの画面に対ドル円相場のチャートを映し出した。時々刻々と動く折れ線の先には、天気図の台風の進路予報のような図形があった。数秒先の相場水準を予想したものだ。高安氏は売り買いどちら動きだが、売買注文のバラ

から上がるから買う、買うから上がる」という流れで、相場が過熱し、その後に反動がくる。逆に、売りが売られを呼び、相場が急落する。経験上よく知られる相場の動きだが、売買注文のバラ

から上がるから買う、買うから上がる」という流れで、相場が過熱し、その後に反動がくる。逆に、売りが売られを呼び、相場が急落する。経験上よく知られる相場の動きだが、売買注文のバラ

## 真の人気銘柄浮き彫りに

金融工学は統計や確率論を基礎とし、数学のモデルから外れる予想外のマーケットの動きに弱い。ビッグデータは、投資家の気まぐれな動きもデータとして取り込み、そうした弱点を克服しようとしている。

今年のノーベル経済学賞受賞者ロバート・シラード教授は、投資家心理の揺れ動きが米国の大企業の株式や住宅市場でバブルを生み崩壊を招いたとする

融分野でも重要性が増すことを話す。ネットにあふれる膨大な情報が超高速化した取引のなかで瞬時に消化される。そんな時代が、すぐそこまで来ている。

融派生商品)やコンピューターによるプログラム取引などを開発した。

半面、98年の米ヘッジファンドLTCMの破綻や2008年の金融危機では、最新の金融理論の落とし穴も明らかになった。投資家が恐怖心から売買を見送り、市場の流動性が乏しくなる突発的な事態に従来の理論は対応できなかつた。

金融工学は統計や確率論を基礎とし、数学のモデルから外れる予想外のマーケットの動きに弱い。ビッグデータは、投資家の気まぐれな動きもデータとして取り込み、そうした弱点を克服しようとしている。売買動向などマーケットの実際の取引データだけで研究で知られる。相場の流動性を左右する投資家の心理測などをデータとして活用する動きも出てきた。ネットにあふれるニュースやブログ、「ツイッター」のつぶやきなどの分析を投資判断に生かす試みだ。

金融工学者の山田洋一郎氏によると、「